

『四座御役者手鑑』について

樹下文隆

このたび、国文学研究資料館の所蔵に帰した『四座御役者手鑑』は、刊本の零本ながら他に存在を聞かない孤本で、綱吉時代の観世・宝生両座の様子を伝える貴重な資料でもあるので、誌上を借りて紹介を試みる。

最初に、書誌的事項を述べる。縦一〇・九糎、横一六・二糎、紺表紙で中央に題簽の痕跡あり、袋綴で全二十六丁、無刊記の小型横本一冊。はじめ三丁が目録で、冒頭に「四座御役者手鑑目録」と題し、柱には「巻下一(二十〇)」とあり、乾坤二冊の内の下巻のみ存す。目録題以外に書名はなく、その左余白に「鴻山文庫」の子持梓方形朱印あり、『国書総目録』に唯一所載の鴻山文庫蔵本であることがわかる。本文十一行、漢字仮名交じり文で、漢字には時に振り仮名を施す。保存状態悪く、ほぼ全丁に虫損の補修あり。

内容は各役者について知行・切米・扶持方、住所、系譜等を記しているが、観世織部の六十一行が最大で、最小は一行、だいたい五

十行程度の簡単なもので、観世座十六名・宝生座十七名・御部屋役者衆十名・触流(惣役者衆取次)四名、計四十七名の役者を載せる。以下に、目録によって収録役者を示す。

観世織部・梅若六郎・観世三左衛門・服王  
 茂兵衛・進藤権右衛門・幸清次郎・幸五郎  
 左衛門・春日市右衛門・樋口久左衛門・鷺  
 仁右衛門・鷺権之丞・鷺山三郎・葛野市郎  
 兵衛・葛野九郎次郎・森田庄兵衛・観世左  
 吉(以上、観世座)、宝生九郎・同息政之  
 丞・春藤新之丞・同息権七・春藤六郎次郎  
 ・保生新九郎・同息・命尾権三郎・服部重  
 三郎・大蔵喜太郎・同次郎太郎・脇本作左  
 衛門・同伝左衛門・幸五郎兵衛・中村六郎  
 左衛門・成徳甚左衛門・清甚兵衛(以上、  
 宝生座)、高井平右衛門・大蔵市郎兵衛・  
 同息市五郎・大蔵作十郎・同息長八郎・大  
 蔵六兵衛・竹中庄次郎・中桐新右衛門・清  
 水助右衛門・森孫右衛門(以上、御部屋役  
 者衆)、松井喜左衛門・同弥左衛門・山田

藤右衛門・同七兵衛(以上、惣役者衆取次)ざっと見ても、観世座小鼓の新九郎親子が貞享元年に宝生と改姓させられ、元禄九年まで宝生座に属させられたことを反映すること、観世大夫が貞享三年に隠居した左門重賢でなく養子の織部であることや元禄八年没の鷺山三郎が載ることなど、ほぼ貞享・元禄期と特定できる。この当時の役者付としては、各種の『武鑑』や貞享四年版『能之訓蒙図彙』巻二「江戸四座之名付」、その補訂版の元禄十年刊『能之図式』巻六卷末役者付などがある。所載の役者数からいうと、『能之訓蒙図彙』から地謡を除けば観世十八名・宝生十四名、元禄四年『武鑑』では観世二十五名・宝生十三名と、増減はあるもののほぼ同様で、本書も主要な役者は大体収録していると思われる。しかし役者名が本書と一致するのは、『能之訓蒙図彙』が十七名、『能之図式』は十四名、元禄四年『武鑑』は十六名(観世・宝生座)と、約半数しかない。御部屋役者や触流まで載せ、住所や禄高を記す点などは、『武鑑』に似せたといえよう。

本書の成立年代に関しては、春藤六郎次郎(宝生座ワキ)の項目が興味深い。

此家は新之丞、養父権七兄の家なり。六郎次郎に男子なきゆへ、権七二男をやしなひ、子とせられしに、かたじけなくも

当公方様より、貞享三丙寅七月廿六日に、  
桐の間の衆、御召なさせられ、先権七末  
子を六郎次郎跡目に御付させられ、此座  
へ御付なさせらる。もとは六郎次郎は觀  
世座にてありし。

六郎次郎は、『徳川実記』によれば貞享三年  
八月二日次番に召し出され、斎藤新八郎と称  
した。しかし、当時幕府から弾圧を受けた日  
蓮宗不受不施派の信仰を固持したため、翌年  
二月十四日、父・兄弟ともに三宅島に遠流と  
なり、その後改宗したため、元禄十四年二月  
九日召還され廊下番となった。したがって、こ  
の記事は貞享三年八月から貞享四年二月のご  
くわずかの期間を反映したものと見えよう。  
ただしこは、『隣忠見聞集』では

その子は御構ひ無く春藤源七養子とな  
り、後剃髪名をけいそくと改め松平阿波  
守殿へ伽役になり廻り出で、脇をも勤め  
しが若死せしなり。

とあり、両説の内容の相違はさておき、後を継  
いだ子に類が及ばなかったとも考えられる。  
特に本書の通り権七の子（つまり新之丞の義  
兄弟）であれば、その縁で宝生座に属させら  
れたのだろう。かりに、この記事が年代の下  
限を証明できないとしても、中村（一噌）六  
郎左衛門が元禄元年六月十三日に廊下番に召  
し出されたことに触れず、元禄二年八月二十

八日にやはり廊下番に召された脇本作左衛門  
や大蔵喜太郎にしてもそのことに言及してお  
らず、元禄三年没の幸清次郎の名があるなど、  
元禄初期までの内容であることは動くまい。

本書は、取り上げた役者が觀世座より宝生  
座の方が多いことに象徴されるように、綱吉  
時代の宝生流繁栄のさまを顕著に描いてい  
る。先の春藤六郎次郎の例も觀世から宝生に  
移ったことが本書で始めて知れる。ほかにも、  
脇本作左衛門（宝生座狂言）について、

もとは北七大夫支配なりしが、貞享三と  
らの年より、此座に御付あるこそ、保生  
めんぼくなり。

とあり、喜多七大夫父子の追放（貞享三年二  
月五日）後、元禄二年八月二十八日廊下番に  
召されるまで（または喜多が許される貞享四  
年五月十日まで）、作左衛門が一時期宝生座に  
属したことが本書によって明らかになった。  
小鼓の新九郎についても

いにしへより觀世座にてありしが、当御  
代に、此座に被為付、名字をも保生と御  
かへ有し、保生家の面目、なに事かこれ  
にしかんや。

という書き振りで、宝生九郎を「当世日出の  
大夫」と称す本書は、零本ながら將軍に晶履  
された宝生座の繁栄振りが窺える好資料。

（国文学研究資料館助手）